

第 69 回日本放射線技術学会総会学術大会 印象記

花岡 宏平

Hanaoka Kohei

はじめに

2013年4月11日から14日までの4日間、パシフィコ横浜にてJRC2013が開催された。日本ラジオロジー協会（Japan Radiology Congress；JRC）を構成する4団体である、JRS（Japan Radiological Society）による第72回日本医学放射線学会総会、JSRT（Japanese Society of Radiological Technology）による第69回日本放射線技術学会総会、JSMP（Japan Society of Medical Physics）による第105回日本医学物理学学会学術大会、そしてJIRA（Japan Medical Imaging and Radiological Systems Industries Association）による2013国際医用画像総合展が合同開催されたことが特徴である。

JRCでは多くの研究発表と企業等による機器展示展が開催され、全国から毎年2万人以上の参加者があると言われている。今回、筆者は第69回日本放射線技術学会総会を中心に出席したので報告する（写真1）。

今大会の特徴について

大会のテーマは、“Creation, Innovation, and Globalization（知の創造、技の革新、そして世界へ）”であった。これまでの大会においても新規性のある放射線技術に関する報告が、多くなされていたことは今更言うまでもないが、今回の大会ではより国際的な学術大会としての方向性が表れていたように思われた。まず演題発表区分であるが、口述研究発表としては441演題、一般研究発表には206演題が採択され、う



写真1 エントランスにて

向かって右側が大阪大学 畑澤順教授、左側が筆者

ち85演題（海外から17演題、国内から68演題）が英語口述発表として採択されていた。また、学会側でスライド等の英文校正をサポートする体制が取られていたことから、これまでより一層英語化（国際化）に対して力を入れていることがうかがえた。発表形式にも一部で変更があった。大部分の演題はこれまでと同様のものであり、1演題当たり10分間（発表時間は7分、討論3分）の時間が割り振られ、セッションごとの座長による進行に従い、壇上で順番に発表を行う形式であった。今回はそれに加え大型ディスプレイの前に30分間発表者が立ち、参加者に対して各自の演題内容を説明し、直接質疑応答を行うという形式が採用されていた。

最近の学会の特徴として電子ポスター（CyPos）や学会専用アプリケーションソフト

の充実が挙げられる。CyPos は事前登録者が学会期間前にインターネット経由で自宅等のパソコンから演題を閲覧できるシステムである。本大会の CyPos では閲覧画面に“いいね”ボタン機能が搭載されており、会場で発表後に拍手を送るような発表者と聴講者間のやりとりが、間接的ではあるが表現できるように工夫されていた。今回筆者は「核医学検査 SPECT (補正)」のセッションにて座長を務めさせていただいた。このセッションの中では4つの演題が発表されたが、いずれも十分に新規性を有する内容であり、臨床データの信頼性を担保するといった面で価値の高い演題であった。そして、円滑にセッションを終えることができた1つの要因として、CyPos システムの利用による演題の事前閲覧が挙げられるのではないかと感じた。また学会専用アプリケーションソフト(写真2)は、プログラム・抄録集を電子書籍化したものである。プログラムなどを観覧するだけでなく、参加したいプログラムのスケジュールを自分用に組める“マイ・スケジュール機能”をはじめとして、多彩な機能を iPad, iPhone などの携帯情報端末で利用できるという特徴がある。会場では従来からの印刷物としての抄録集にメモを取る参加者も多く見られ、電子化にすべて置き換わるようなことは当分ないと思われるが、今後は他学会でも普及していくことと思われる。

今回の大会では3つのシンポジウムが企画され、そのうちの1つの千田道雄先生、西村伸太郎先生等による「日本における分子イメージングの今後」を聴講することができた。欧米では既に医薬品の臨床開発の各ステージにおいて PET が活用されている。具体的には、非常に低い投与量で医薬品のヒト試験を行い、体内での薬物動態を調べるといった PET の利用方法は、比較的安全性が高く、かつ新薬開発コストの削減につながると期待されると報告されてい



写真2 学会専用アプリケーションソフトの画面

た。国内においては様々な規制があり、直ちに普及することは困難であるが、PET/CT 並びに PET/MRI における撮像技術や解析技術の向上を目的とした研究は、今後大いに求められていくものだと感じられた。

最後に

ここ数年の傾向であるが、当学術大会において核医学に関する研究発表は、広い会場の中で最も駅や会議センターから離れたアネックスホールにて行われることが多い。しかし今回の大会で見られたような充実した発表や質疑応答を継続し、しっかりと報告していくことで、日本の核医学技術を世界に発信し中心的存在と認められるよう努力することが我々の責務であると感じた。来年開かれる当学術大会のテーマは“Face to Faces, Face to Communities, Face to the World (向きあう つながる そして広がる)”である。充実した学会期間を過ごすためにも日々たゆまぬ努力を続けたい。

(近畿大学医学部附属病院 中央放射線部,
大阪大学大学院医学系研究科 核医学講座)